

公開シンポジウム

市民、NPOのまちづくり

—首都100キロ圏のくらしの豊かさを再発見する—

○中村陽一（作新学院大学地域発展学部長）

皆様、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。地域発展学部というのは聞きなれない名前かと思いますが、各地の地域社会をますます住みやすく、働きやすくすることを目標にしまして、そのためのノウハウを蓄積する。また、そういうノウハウを持った人材を社会に送り出すことを使命にしております。きょうは、そういった使命を実現していく一つの試みとして、公開シンポジウムを開催することにいたしました。これらの講演や討論を通じまして、広くは地域社会の発展、より具体的には、首都100キロ圏に属する都市の発展に大きく貢献していただけるものと確信しております。

○和田尚久（作新学院大学地域発展学部教授・広報委員長）

この地域発展学部は学部が開設されて今年で2年目でございます。大学が立地している地域の特性は、単に宇都宮あるいはこの清原工業団地ということだけではなく、まさに首都圏、首都100キロ圏の都市ということで、地域の特性と、学部の名前にもなっております地域発展の方策を地域のひとともに論じてみたいというのが、このシンポジウムの趣旨でございます。その地域の状況であります、わが国におきましては、かつてのような大きなうねりはなくなったと思いますが、東京あるいは首都一極集中はいまだに続いております。人間の数は仮に余り変わらなかったといたしましても、機能的な集中、中枢機能の集中はいまだ続いているように思います。そういった反面で、利便性、保健、安全性その他、首都圏の限界もいろいろな形で見えてきているように思います。

目を転じて首都の100キロ圏を見てまいりますと、ここではむしろ東京都の都心を超えるような歴史・文化を保有しております。生活行動その他いろいろな自然環境等、バラエティは非常に豊かでありまして、この100キロ圏には生活の豊かさの潜在的な可能性が非常に多く含まれております。

そして、まちづくり、地域づくりと申しますと、どうしても行政の仕事という感覚がございます。行

基調講演

田村 明 法政大学法学部名誉教授

パネリスト

戸所 隆 高崎経済大学地域政策学部教授

斎藤 義則 茨城大学人文学部教授

新川 忠孝 下野新聞社論説委員長

松本カネ子 栃木県ボランティア連絡協議会
会長

橋立 達夫 作新学院大学地域発展学部教授
司会

檜 貢 作新学院大学地域発展学部教授

政からだけではない政策の展開や提案の可能性を、このシンポジウムで皆様とともに考えていきたいと考えております。

「首都100キロ圏のまちづくり」

法政大学法学部名誉教授

田村 明

この学部は「地域発展」をテーマとする学部であって、まさに地域のために地域をよく教育・研究を行うものなのでしょうね。国家のために地域が犠牲になるということではなくて、地域がもちろんよくなる。しかし地域だけがよくなってもしょうがない。日本列島もその結果、全体としてのよくなる。こういう学部の名前をつけたのは大変おもしろいと思います。最近ではこれからのテーマを掲げた大学や学部がありますが、地域発展学部は、中でもユニークさを持っていると思います。

ところで今日は首都圏の話ですが、首都圏という言葉はもう定着してしまっていますね。でも、「首都圏」という言葉はそんなに昔からあったわけではないんです。少なくともこれは戦後につくられた言葉です。正確に言うと、1956年に「首都圏整備法」という法律ができて、東京だけを考えるのではなくて首都圏一帯を考えなければいかんということになり、そこで「首都圏」という言葉が生まれたわ

けです。当時は大変新鮮な言葉で、東京だけではなく、丸ごと首都圏全体を考えなければいけないということになりました。もっとも、東京都だけが考えられないのは当然ですから、東京の周辺を考えるとというのは終戦直後、つまり1945年（昭和20年）に早くも始まっているわけです。

この時期には40キロ圏で考えました。当時は「衛星都市」というものを東京の40キロ圏に配置しようという計画があったのです。そしてそのころ、宇都宮とかこの辺の100キロ圏には「外郭都市」という位置づけでした。「首都圏」という言葉はまだ生まれていませんでしたが、東京を中心に40キロぐらいを考えなければだめだぞということになったわけです。その後、40キロぐらいではおさまらないということになりまして、1950年に「国土総合開発計画法」ができました。その時に首都の範囲を60キロ位のところにするとということになりました。ただ、これは余り定着はしない言葉でしたが、「東京湾圏」という言い方をしています。東京湾を中心とした地域、今で言うと南関東4都県です。何となく60キロに広がったわけです。これが1950年（昭和25年）でした。それから6年たちまして、どうも60キロぐらいではおさまらないぞということになりました。それでは100キロまで考えようということになり、そのときに「首都圏」という言葉が生まれたわけです。今は首都圏という言葉を知らない人はいますが、1956年、45年前からですから、もう5年たつと首都圏という言葉を使い始めてからちょうど50年たつということです。

ところで、イギリスでは戦争中の1944年からロンドンを中心に首都圏の議論を始めまして、「大ロンドン計画」を1946年につくりました。わが国の場合にはその真似をしてつくりました。だからうまくいかないと言う人もいるのですが、いずれにしても「大ロンドン計画」は、一つの都市ではなくて、一つ一つの都市がたくさんある大きな圏域として考えるというものでした。大ロンドン計画の場合には、これを統括するロンドン首都圏庁という官庁をつくりまして、これが全体のことを取り仕切る。日本の場合はそこまでいきませんで、首都圏整備委員会という行政委員会がこういう問題を考えることになったわけです。

1956年、45年前に「首都圏」という言葉が生まれましたが、このときはちょうど100キロ圏で切ったのです。ですから栃木県とか茨城県、群馬県の主な都市である水戸、宇都宮や前橋は入っていない。高崎は入っていますがそこで切れてしまうわけです。

あとの那須の方はまだ入っていない。県の中でも首都圏である所とない所が途切れておりました。これはちょっとややこしいぞと、その後に首都圏計画が改善されました。1968年（昭和43年）に第2次首都圏計画をつくりまして、面倒くさいから県の範囲は全部首都圏の範囲にしてしまえということで、茨城県、栃木県、群馬県、山梨県も入りまして、8都県となりました。現在の首都圏の範囲が行政的に生まれたわけです。初めは東京を考えると立場だったのですが、だんだんと東京だけでは狭いから40キロぐらいを考えよう、その次は60キロぐらいで考えよう、その次は100キロで考えよう、その次は目いっぱい県で考えようということで、だんだん拡張して生まれてきた概念で、初めからあったわけではなく、随分変わってきたわけです。その詳しい内容は申し上げません。でもここで言われているのは、余り東京に集中し過ぎてはいかん、もう少し周りに分散しろということです。特に宇都宮とか水戸、前橋は外郭的な都市として、法律的には「都市開発区域」に指定されまして、多少は税制等の優遇措置をして、ここが発展するようにしているわけです。しかし相変わらず東京にかなり集中しまして、東京からのスピルオーバーを食い止めるというほどではなく、それぞれにある程度開発がされているということになります。

ざっと「首都圏」という言葉の意味を申し上げましたが、茨城県、栃木県、群馬県、山梨県の4つは周辺4県という扱いにされております。この区域は、昔、新幹線ができる前ですと2時間半から3時間以内の区域です。その範囲内で行けるということは、朝行って昼に着いて仕事をして、夜帰ってこられる日帰り圏であったわけです。もう一つは、関東平野がありますから、平野をいっぱい使っていて、山の所まで首都圏です。山梨県はちょっと別扱いですが、こういう扱いになってできているわけです。首都圏計画には、東京の拡張を食い止めようという意図があったわけです。東京だけではなくて、広く考えれば40キロ圏もそうなのですが、東京都区部と言われる昔の東京市の区域では、戦争中は300万人を切りました。戦前は500万人近かったわけですが、それが戦争でぐっと減りました。そこで、東京の区部には余り人間を入れない、ここは350万人にしようということが一応計画に書いているわけです。しかしこれは全然守られませんでした。そのために転入制限をしまして、東京の区部に入るには大変ややこしい手続が必要な形にして、特定の人間しか入らないようにしました。しかし何だかんだと東京に入って

きてしまった。私の家は東京の目黒にあったのですが、幸い焼け残りました。でも、家を焼かれて住まいがないものですから、いろんな名目でいろんな人たちが入りまして、まるで雑居家族でした。だんだん人間があふれてきて、あっという間に350万人を超えてしまい、計画などはどこかにすっ飛んでしまったわけです。そこで、それを食いとめるために周辺都市40キロ圏ぐらいでまちをつくらう、次は60キロ圏ぐらいでまちをつくらう、あるいは100キロ圏ぐらいでまちをつくらうという言い方をしてきたわけです。しかし実際には、思惑のとおりには全くないのが現状でございます。

今まで東京を中心とした首都圏の成立のプロセスを申し上げたわけですが、これに対して、首都圏がそもそものモデルにした大ロンドン計画というのはどういふものかということです。これは、戦後の都市を早くも戦争中に考えているわけです。戦争でこちらがきゅうきゅうやられているときに、大ロンドン計画の委員会をつくりまして、ロンドンの市街をどうするかを考えました。ここでは、ニュータウンと称する幾つかの都市を、ロンドン周辺に近い所で40キロ、遠い所で60キロぐらいの所に計画的につくって、これからのロンドン発展の要素はそこに入れようではないか。それは決してロンドンに従属的なまちではなく、それ自体が独立しているまちをこしらえようという計画を立てたわけです。つまり独立しているまちがロンドンを取り巻いております。ロンドンの周りにはグリーンベルトがあって、大都市からちょっと外に出ると、たちどころに田園地帯が広がっている。その周辺に広がっている幾つかのニュータウンも、もちろん田園に囲まれている、こういう計画を立てたわけです。

この思想を一番最初につくりましたのは、今から100年前の1902年です。本当は1898年ですから今から103年前に、「Tomorrow」を書いたエベネーザー・ハワードという人です。後にこれが1902年に「ガーデンシティ（田園都市）」という名前が変わるわけです。今、「田園都市」と我々は気軽に言います。「ガーデンシティ」をそのまま訳せば「庭園都市」ですが、これをそのとき日本人は田園都市と訳したわけです。田園都市というのは、日本で一つの流行になりました。

この思想は、都市というのは余り大きくてはいかぬ、都市というのは小さなまちで自立的でなければいかぬというものでした。これを民間の人が提唱して、実際に実験したのです。それを取り上げたのが

さっきの大ロンドン計画で、少し違いますけれども、思想的には、エベネーザー・ハワードが1898年に書いたものを、1946年に英国の中で取り入れていった。約50年ぐらい経ってから、この民間の計画が政府の計画になってしまった。むしろ民間の方が先導的にまちづくりをしているということの証左なのです。エベネーザー・ハワードはロンドンなんかなくてもいいんじゃないかとまで言っていました、それまで実験を繰り返しながらやってみて、やはりロンドンをなくすわけにもいかない。このまちがあって、なおかつ独立したまちをこしらえようという計画で成り立っています。日本の首都圏計画の中でもグリーンベルトが計画されましたが、あっという間にこれは計画上也消されてしまいました。いずれにしても、行政がつくった計画は大体全部が潰れてしまっていないんですね。そして、そこにつくった衛星都市のようなものも、東京を拡張するためにつくられる形になってしまったわけです。つまり、東京がどんどんどこまでも広がってしまうという計画です。ところが大ロンドン計画では、確かに形は似ています。周りに幾つかのまちを配置して、ロンドン自体が余り大きくなるのを食いとめようということなのですが、それぞれの小さなまちは皆、独立しています。ロンドンに従属しているまちではありません。中には本社勤務があったっていいじゃないか、そういうふうなまちをつくらうということだった。それぞれのまちで大きい小さいはありますが、それぞれ独立した小さいまちが幾つかあって、そのまちが連合しながら、ロンドンに過度集中するのを食いとめるということです。つまり、中央から余ったものが外にはき出されて形成されるのではなくて、初めからそういうものをつくって、余り真ん中を大きくし過ぎないようにしようということです。日本の場合にはちょっと違ってまして、どちらかというと、東京に集まってきたら、しょうがないからこれをどこかへ追出そう、追出す場所は40キロがいいか、60キロがいいか、何キロがいいかということで、形は似ているのですが思想が違うのです。つまり、イギリスの首都圏では大都市に余りやたらと集まってはいかぬ、それぞれの自立した都市がたくさんあってもいい、小さくてもいいじゃないか、自立して独自性のあるまちをつくらうということだったわけです。

ですから、日本のものとよく似ているのですが、思想が違うわけです。都市がだんだん膨れてくると、余った所へ広がる。そうすると、また膨れてくる、これが日本のやり方です。多摩ニュータウンなんかそうです。東京がどんどん発展してくる。そが

どんどんスプロールする。ところが大ロンドン計画は全然違って、衛星都市とかニュータウンとかいろいろな言葉で呼ばれておりますが、これはずっとはみ出したからではなくて、初めからそういうところにこれから発展するものを置いて、本体が初めから余りにも大きくなるのを防ごうという趣旨です。結果的には似ているようで、思想的にはかなり違うわけです。今、第5次計画になっていますが、今の計画では、この辺の大体100キロぐらいの所をつないで、茨城県の常陸那珂港の外側に大きく有料道路をつくって、北関東自動車道としてひたちなかから水戸、水戸から宇都宮、宇都宮から前橋を結んだ北関東の港がある。東京湾を経由しなくても、直接港から入ってこられるように、外側に一つの独立した圏域をつくらうという計画に一応なっているわけです。

ところで、ちょっと古い話に変わります。私は江戸がどういふふうにできたかを古代からずっと勉強してみました。そして江戸・東京に関する本も書いたのですが、古代には、関東地方はどういふ格好をしていたか。私はドーナツ型の地域だったと思っています。都心が空洞化してしまうドーナツ都市ということでなくて、初めからドーナツだった。それはどういふことかという、関東地方というのは、むしろ周辺部の山手に近い所が先に発展したと思います。その中で一番発展しなかったのがつまり武蔵の国、江戸のあたりなんですね。そこは全くの空白、空洞地帯だった。なぜそうなのかということは長くなってしまうのでやめますが、実際に、東山道と東海道に挟まれた東京のあたりは一番抜けている場所なんですね。海沿いは、三浦半島から千葉県に渡りますと上総の国になりますが、余り使いよくなかったのです。なぜかという、海沿いは湿地帯ばかりで余り通れないのです。今の東海道も、皆さんが考えている東海道よりはるかに山側を通っています。徳川家康が入ってくる時代でさえ、400年前ですからかなり近いのですが、今の東海道ではありませんでした。ずっと山側の、今の国道246号に近い方を通っていたわけです。決して今のように海側を通ったわけではないのです。もう一つは、東京湾も埼玉県県のずっと奥の方まで入っていました。それがだんだん海が陸化しまして、東京湾が今のよう形になってきたわけです。例えば駅名でご覧になっても、東京のすぐ近くに埼玉県の入口に川口という所があります。あれは川の口だったわけです。その頃は多くの川は東京湾に注いでいました。旧利根川は東京湾に注いでいました。渡良瀬川も独立の川で、これも東京湾に入っていました。鬼怒川だけはちょっと東

の方に行くわけですが、利根川本流や大きな川は全部、東京湾に入っていたわけです。ですから東京のあたりはぐじゃぐじゃなんです。キャスリン台風というのが終戦直後にありまして、大きな台風でしたから利根川が決壊しました。そのときの川筋を見ますと、まさにあそこは全部利根川だったんだと思うぐらいに、今、東武線が走っているあたりは全部河畔だった。

そういう地帯ですからとても真ん中などには人間が住めないのです。山側は土地がしっかりしていましたから、山側の方が発展した。海側もほんの一筋だけ発展して、真ん中の東京は実は空洞地帯だったわけです。ただ、今の山手と言われている所は、今度は逆に水がないのです。つまり、井戸は少々ありますが、田んぼをつくるほどの水がない。ですから、せいぜい牧場にして馬を飼うくらいでした。牧場というのは要するに、ほかに使いようがないから牧場にでもしておこうかということです。東京には大変そういう名前が多いですね。駒場とか、駒込、駒沢とか牛込、下馬や上馬、東京の中には馬の付く所がたくさんあります。そのように、牧場ぐらいにしか使えない、ほかの耕作ができない。牧場よりは耕作の方が生産性はいいわけですが、水がないからできない。

こういう状態ですから、決して東京のあたりはいい土地ではないのです。全くの空白地帯だったのですね。ですから古代から中世にかけては、山手の方が栄えます。この地帯は、「毛野(ケノ)」とか、それがなまって「ケヌ」といいます。これには上と下があって上毛野と下毛野の2つになったわけです。710年に平城京に都を移したときに、国の名前は3文字はいかん、全部2文字にしろと中央から命令が下ったわけです。それで、「毛」を抜いて「下野(しもつけ)」と「上野(こうづけ)」になったのです。3文字でもいいということだったら、現在でも「下毛野」と3文字だったのですが、2文字にさせられてしまった。でも、この「毛の国」はそれなりの文化・力を持っておりました。

ところで、中世の初めのころに江戸に住み着くのは、江戸氏ということ侍がいたんです。その次に太田道灌があらわれます。太田道灌というのは一応軍人なのです。ただ道灌というのは、当時の足利將軍家の出先みたいな公方様という足利の一族がいて、その下に管領がいます。その管領が上杉家で、その2つに分かれますが、その管領家の執事が太田家です。だから、將軍の出店の出店の管領の、またその執事が太田道灌なんです。ですから関東の中

心になるような立場には全然ないのです。ただ、内戦をしております、内戦をするための拠点が江戸だったわけです。一つの勢力があって、足利家の一族に当たりますのは丘の方に立てこもって対抗する。片や鎌倉が対抗する、公方と管領が対抗するという構図になりまして、そのとき江戸というのは前線拠点であったわけです。まちづくりをするような場所ではありませんでした。ですから長いこと、江戸というのは関東平野の中心ではありませんでした。

この江戸氏の源流を辿りますと、元は埼玉県の奥にある秩父平氏の一族がいて、これがだんだん荒川の川沿いに流れてきて、川越氏とか豊島氏、葛西氏、そして最後に流れ着いたのが江戸氏です。ですから江戸氏はどこから来たかという、荒川沿いに下りてきたわけです。山の方から皆始まっているのです。

真ん中は空白地帯で、戦争をしている場所です。そこに徳川家康が入りまして、今度は逆転します。400年前まではむしろ今首都圏計画が行われている周辺部の方が盛んであって、真ん中は空いている。周辺部からだんだん攻め込んできたといいますか、いろんなものが流れ着いた所が江戸であるというぐらゐの感じだったのですが、家康が入ってくると、江戸を中心としてどういふふう構成していくかということで逆転してしまったわけです。ご承知のとおり、ちょうど400年前に5街道という制度ができました。甲州街道や東海道、中山道、これは全部、江戸日本橋を起点にします。つまり今まで端にあった江戸というものを、1年で引っ繰り返したわけです。そして江戸を中心としてやるようにした。今皆さんから見ると、東京が中心で、そこから道が通っているのは全然不思議に思いません。今、東京が中心になっている地図を見て、日本列島の中心だから国の中心になるのは当たり前だろうと皆さん思うでしょうが、家康以前の400年ぐらい前ですと、逆で、むしろ周りの方に江戸の文化や力を持つ人たちがたくさんいた。それが少しずつ少しずつ開拓したりして、関東平野を治めていった。その代表的なのが平将門です。「開拓人の政府をつくろう」などということ言って、関東平野で政府を始めます。結局潰されちゃうんですけど、潰したのが栃木県の佐野の辺りにいた藤原秀郷です。茨城県のあたりも、筑波山がちょっと飛び出しておりますので、山を拠点としながら少しずつ周りを開拓し、開拓農民が広がってきて力を持った。これが関東武士なのです。その親分に源頼朝がいて、鎌倉という所を拠点にした考えが出てくる。鎌倉というのは拠点でも何でも

なかった。関東が耕作されてきて、力を持つことによって、その中心として鎌倉が選ばれたということです。ですから皆さん方が今思われているように、決して江戸にすべての中心があって、そこから流れがきているのではない。それを説明するために、大分長くなってしまいました。

その中でも一つ、江戸時代には日光がありましたので、江戸幕府では宇都宮を重視していたわけです。ところが余り重視し過ぎて、時代がわりしてから宇都宮釣天井みたいな有名な講談になります。あれはいろんな解釈がありますが、それだけ有力な大名を宇都宮に配置していたということでしょう。江戸を中心として日光の押さえと同時に、伊達に対する押さえなんですね。その後は平和になりましたから余り問題なくなりましたが、譜代大名ですから有力大名だった。

その話は別といたしまして、そういう中で、では現代はこれからどう考えていくか。中心から流れ着いたのではなくて、本当は周りの方にいろいろな文化の中心があったわけです。それが江戸時代に逆転させられて、明治政府になってもう一遍さらにそれを強めて、戦後にさらに東京集中を強めた結果が、首都圏の形成だったわけです。

ですから、それぞれの地域には元からいろいろな文化があったわけです。東京はいろいろなものの寄せ集めとして発展してきたのであって、それを生み出す要素はその周辺部にあったと思っています。その周辺部がちょっと力がなくなっているけれども、これからの時代は、東京からはみ出した受け皿としてではなくて、そのまちはそのまちとしての文化を持ち、発展の形式を持ち、そして独自性を持つていかなければいけない。東京のはみ出したものだけを受けとめていても、それではしょうがない。自分たちが何であるかということからスタートしてやる時代になってきたと思います。

実は私は、東京から30キロの横浜というまちでまちづくりをやりました。私は東京生まれの東京人で東京が大好きなのですが、でも横浜でやったテーマは、第一には「東京の真似はしない」ということです。東京の真似をしてもかないっこないんです。同じまちがすぐ30キロの所にあるのでは負けてしまう。だから横浜は東京でやらないことをやろう。詳しくは説明しませんが、そういう考え方でやりました。東京のことは東京で間に合わせればいいじゃないか、横浜は横浜にしかないことを発見してそれを伸ばしていこう。横浜は近世までには大した歴史がありません。でも、近代の歴史の中で使えるものを拾い

ながらやっていくということなのです。

宇都宮の場合には、逆に、長い間の文化が存在しているわけですから、そういうものを掘り起こして独自のものをつくり出す、それが、地域発展ではないかと私は考えております。そうすると、それは今までのように首都圏計画がどうなっているということではなくなります。それも一応知っておいてもいいですけども、そんなものをやったからといって発展方向は明らかにならない。宇都宮なり栃木県という100キロ圏のまちは、首都圏の影響を受けるような受けられない位置にあるのです。このごろでは100キロ圏ではなくて、300キロ圏の仙台だ何とかなどと言う人もいますが、新幹線で随分早くはなりましたけれども、ある程度の独自性をみずから持てるのです。私は30キロしか離れていない横浜で独自性をどう持つか工夫しました。100キロなら十分にそういうものが持てるはずなのです。

では、どうしてそれをやるかということですが、お役所だけに任せておいてそれができるわけではありません。お役所はいろいろな計画を立てるかもしれませんが。でもお役所の計画はやはりお役所の計画なんですね。地域の市民が自分たちのまちをどう考えていくのか、どうつくるのか、実際に役人の財政の力をもってお金から何から全部処理してつくるというものではないんですね。織田信長が安土城を築いたときには、楽市楽座をやるから来いということで、市民の力を借りているようで、実はやはり全部殿様が支配している。だから信長が明智光秀にやられてしまうと、まちが潰れてしまったわけです。そんなまちではしょうがないわけです。本来のまちはやはり市民がつくっていくわけです。

例えば博多と福岡です。博多と福岡はどう違うのか。元々は博多というまちで、ここは長い間かけて商人たちがつくったまちなのです。そこに黒田氏が乗り込んできて、博多ではなくて福岡にしよう。福岡というのは彼がいた岡山県の小さな小さなまちなんです。福岡という町は岡山に近い今でもありますが、その町の名前を持っていっただけなんです。博多のまちの人たちは頑強に抵抗しまして、全部福岡にせず、お城のある所は福岡で、俺たちの方は博多だとした。議会で1票差で福岡になっちゃったんです。それなら町の名前は福岡になってもしょうがないから、では駅の名前を博多にするということになった。安土のまちみたいに、殿様がつくったまちは、いくら大発展しても殿様がなくなったらそれでおしまいなんです。黒田さんは幸い長く続きましたから、福岡も続いていますけれどもね。

まちというのはそう簡単に5年や10年ではできませんが、長続きさせていくためには、市民の力をどうやって結集しつづけるかなのです。最近ではNPOということも言われてきまして、そういう団体もあると思います。ただNPOでちょっと気に入らないのは、ノン・プロフィット・オーガニゼーション、つまり特定非営利活動促進法人なんです。なぜこんなにややこしい名前になってしまったかという、元々の法律は「市民活動促進法案」だったのです。ところが国会で議論をしているうちに、「市民なんて認めない」と言う人がいまして、「特定非営利活動」となった。特定非営利ですからノン・プロフィットなのですが、本来は市民活動のことなんです。だからNPO法人といいますが、市民活動法人と私は心得ています。ただ市民活動というと、今でもだめだと言う人が一方にいるんですね。そういうことを言っているといつまでも自立的ないまちができない、自分で自信を持ったまちができない。東京から100キロに個性のないまちができてだめなんです。水戸でも宇都宮でも前橋・高崎でも、違うまちが連携してお互いに刺激し合うところに新しいものが生まれてくるわけです。都市というものは、違うものが集まりながら、それが交流し合う場だと私は思っております。都市同士も、違う要素がありながらお互いに切磋琢磨して、新鮮な情報を交流し合う。

さっき水戸から来られた方が、水戸からこの大学は意外に近いとおっしゃっていました。普段は東京ばかり行ってしまつて余り来ないらしいのですが、水戸から宇都宮は意外に近い。そういうことを皆さんは意外に自覚していないんじゃないか。これからは、それぞれの独自性を持ちながらお互いに連携する。それも役所だけに頼るのではなくて、市民活動の中でもつくっていく、そういう自信と誇りを持つ。その中では、もちろん民間企業や公益法人にも大いにかかわってもらって協力をすることで地域の独自性が出てくるのではないかと。それが本当の首都圏100キロ圏をつくっていくのではないかと。ただ東京がずるずると大きくなって10キロなり50キロなり100キロ圏になっちゃったというのではなくて、初めからきちんとしたものがあつたんですから、あるんだったら、現代においてそれを再興させる。再興したものが、東京が近くにあるんだから、そこへ出掛けていくということがあつてもいいんじゃないかと思えます。さっきイギリスのロンドンの話をしました。イギリスの本当のジェントルマンはどこにいるかという、ロンドンにはいない。田舎にいて、それがロンドンの社交や何かの場に出てくるのです。

ロンドンはいろいろな人々が集う場所です。だけど自分たちが生活をしている所は、むしろそうではない場所にあります。ご承知のとおり、オックスフォードやケンブリッジ等の有力な大学も、かなり離れた場所に、独自性をもって、独自の文化をもって存在しているわけです。

もちろん、東京に似て悪いということではないのですが、宇都宮は宇都宮として、栃木県は栃木県として、独自性のあるまちをつくっていただく。そうすることが将来とも豊かになり、市民生活も豊かになり、それがひいては栃木県がよくなるだけでなく首都圏全体がよくなるし、日本列島全体もよくなることにつながってくるのではないかと期待しております。

地域発展学部がますます発展し、地域を發展させていきたいと思います。(拍手)

パネルディスカッション

「首都圏都市における大学と市民の役割を考える」

○檜 楨 (作新学院大学地域発展学部教授・司会)

第2部のパネルディスカッションに入らせていただきます。「首都圏都市における市民と大学の役割を考える」というテーマで、このパネルディスカッションを設けました。ただいまの田村先生の話をしていただけを受けて、地域の役割イメージをしっかりさせていながら、できれば市民そして大学の役割が見えることを期待しています。

最初に戸所先生から、都市の首都圏構造の中で、先ほど田村先生の言われたことを少し裏づけるような議論を含めながら、先生の特論を展開していただきたいと思います。

○戸所 (高崎経済大学地域政策学部教授)

首都圏の構造と宇都宮、水戸、前橋・高崎が、今どういう状況にあるかということについてお話しさせていただきます。

宇都宮、水戸、前橋・高崎、甲府は、東京駅を中心に100キロの円を描きますと円の上にきれいに乗ってくる。ここはかつての城下町で、それぞれ重要拠点でありました。明治以降も県庁所在都市になり、首都圏の外郭中核都市として、交通拠点とか、卸売・小売業の中心、あるいは地方業務核都市として工業社会のある意味では優等生として成長してきたものです。それぞれの性格というのは、先ほどのお話にもありましたように、30キロ圏とか40キロ圏という

のは、東京と一体になっている地域でありますし、60キロ圏は、東京圏の日常生活圏のなところもございます。しかし、100キロ圏の5都市は、独自の都市構造・都市圏構造をもち、それぞれが個性豊かな地域を今までつくってきています。

機能的には似た都市群であっても文化的には異なっています。宇都宮市の銀行を見ますと福島とか山形とかに本店のある支店が目につきます。言葉もやや東北弁的な無アクセント系で、前橋・高崎とは違います。文化的には東北ルート・上越ルートなどと放射状になります。このように首都圏は同心円軸と放射軸との組み合わせで構造化されています。それがこれまでうまく機能していましたが、ここ20年ぐらいの高速情報化社会への転換で、変化してきています。その1つは新幹線、高速道路との関連です。例えば新幹線で東京と1時間で行き来できることにより、通勤圏化してきました。高崎駅から毎朝夕乗降している定期券の方が1万3,000人おり、東京の衛星都市化してきたといえます。

その結果、100キロ圏都市の中心性が低下してきている。高崎・前橋、宇都宮などは、首都圏外郭における卸売等で中心性の高い都市でした。その中心性が低下し、圧倒的に高くなったのが大宮です。国としては首都圏の構造を一極依存構造から交流ネットワーク型、分散ネットワーク型に変えようと言っているのですけれども、実際には東京30km圏内の一極集中が進み、大宮が強くなっています。高崎駅や宇都宮駅には止まらない新幹線がいっぱいある。遠くに行く便ほど止まらない。したがって、広域的な中心性がだんだん低下してきている。東京の衛星都市としてのまちに成り下がりがつつあるというのが、この100キロ圏の中核都市であります。

水戸は新幹線がないので若干違うかもしれませんが、宇都宮駅や高崎駅周辺は、マンションの建設は多いが、中心機能が減少している。宇都宮や前橋・高崎の支店を大宮の支店に統合し、このエリアは新幹線を利用して営業するようになってきています。その結果、例えば1974年の卸売販売額は前橋・高崎を1とすると宇都宮は0.81で水戸は0.47、大宮は0.37であったわけです。しかし、1997年のそれは、前橋・高崎を1とすると、宇都宮は0.88、水戸は0.61で、何と大宮は3.4倍の1.26になっています。さいたま市になりましたからもっと大きく伸びるでしょう。要するに、今までの前橋・高崎とか水戸、あるいは宇都宮が担ってきたこの周辺における卸売機能、あるいは太平洋側と日本海側をつなぐ機能がどんどん低下しているのが現状なのです。

執筆者紹介

宮原	均	本学地域発展学部助教授
樋口	徹	本学地域発展学部専任講師
堀	雅通	本学地域発展学部助教授
沼田	良	本学地域発展学部教授
宮本	邦男	本学地域発展学部教授
和田	尚久	本学地域発展学部教授
櫻井	秀子	本学地域発展学部助教授

(平成13年10月現在)

作新学院大学地域発展学部紀要編集委員会 (ABC順)

委員／天尾久夫・堀 雅通・片山克行・中村幸人
補佐者／柴田 碩

2002年3月25日発行

作新地域発展研究

第2号

編集兼発行人／中村 幸人

発行所／作新学院大学地域発展学部

〒321-3295 栃木県宇都宮市竹下町908

TEL 028-667-7111 (代)

印刷所／大日本印刷株式会社